

田平隆行, 田中寛之 (編)

Evidence Based で考える 認知症リハビリテーション

濱 口 豊 太

(埼玉県立大学大学院, 作業療法士)



認知症による生活障害支援のための 評価・介入の指針書

認知症は脳実質または機能の障害によって生活障害が生じる。認知症の中核・周辺症状は、介護者と患者本人との生活にしばしば混乱と不安をもたらす。家族の顔やお互いの大切な思い出までも損なって生活することの凄まじさについて、その家族体験を知る者としてはいくらかでも和らげたいと願う。本書は作業療法を学術背景とした田平隆行氏と田中寛之氏により、認知症に対する評価と非薬物療法としての介入について多数の研究知見を定礎として編さんされた、リハの参考書である。

編者らは、リハの対象を「生活障害」とし、適切な評価と介入のための最新の知見を渉猟し掲載している。認知症者の日常生活を評価する指標は、これまで Lawton や Bristol のスケール等がよく用いられてきた。それらの評価結果を基に認知機能の障害特徴に合わせて介入するためには、生活動作を工程に区分けして、重症度にも合わせて方略を定める必要がある。そのようなリハのプログラムに結合するための評価として、近

年開発された生活行為工程分析表 (PADA-D) が紹介されている。PADA-D は生活がある程度可能な軽症者に用いられる。重症者の評価としては、動作の工程ごとに介助量で表記できる Refined-ADL Assessment Scale が紹介されている。重度認知症者の能力の日内変動や、対応する介護者によって発揮される能力が変化することも、評価の研究によって臨床家の経験が裏づけられていることがわかる。介入も同様に、介入研究の論文を詳細に引用しながら、作業療法、認知行動療法、運動療法等の効果と用法が解説されている。例示された図表がシンプルでわかりやすいので、自ずと介入プロトコルの要点は理解できるはずだ。

リハ介入の手引き書として、一人ひとりの認知症者への実際のプログラムが妥当か、どのような根拠に基づいて評価を行い、介入が組み立てられているのかについてはさらなるアップデートを期待したい。たとえば、chapter 4 には、認知症初期集中支援チームの取り組みや、認知症専門外来で出会う認知症者への評価と介入の方法に

ついで詳しい記述がある。それらの役割機能と患者の集団の特徴が本書のコンセプト通りにレビューされて、介入の目的や課題も整理されている。そのうえで患者の紹介がなされ、生活障害の評価と介入の要点が記述されている。この点は臨床実習や国家試験の参考書としても秀逸である。本書を臨床家が参考とするには、介入の根拠とされている認知症者の集団に効果があるという点だけでなく、その集団に効くとされた介入方法が個人に適用された場合の結果を追究したもう一つのアームが要る。

編者らは、認知症による生活障害の疫学的観点と、個人固有の障害視点とを分けて理解し、その見識に立って研究知見を積み上げる必要性にすでに気づいている。本書が認知症リハに対する評価と介入の指針となって、認知症による生活障害を支援していくことを応援したい。

B5 判 312 頁 4,200 円+税
医学書院 刊
☎ 03-3817-5650